インタビュー

授業との連続性にこだわり見通しと方法を伝える家庭学習指導を

国立教育政策研究所主任研究官　山森光陽

確かな学力を身に付けさせるために、どのような家庭学習指導が効果的なのだろうか。国内外の研究に基づく指導のヒントを、国立教育政策研究所の山森光陽先生にうかがった。

家庭学習にも短所がある

先生方は、家庭学習の習慣が定着している生徒ほど学力が高いことを、経験的にご存じです。これは国内外の研究でも実証されており、特に中学生以上の場合、家庭での学習時間が長い生徒ほど学力が高いことが明らかになっています。実際、限られた授業時数で必要な学力を十分に身に付けることは難しいため、家庭学習もセットにして学力向上を考える視点と指導が不可欠です。

家庭学習の指導法を考える際に、留意したい点があります。それは、家庭学習の短所です。授業と異なり、生徒が一人で行う家庭学習は、自律的な学習能力が身に付く半面、特に学力下位層の生徒にとっては苦痛です。授業で先生と一緒に勉強していても分からないのに、「一人でやれ」と言われても困ってしまうからです。このため、「ワークブックの○ページをやってきなさい」という宿題を出されると、巻末の答えを丸写しするだけになってしまう。一方、学力上位層の生徒にとっては、簡単すぎる宿題に取り組んでもつまらないだけです。いずれの生徒も、時間をかけている割に学力に結び付かない学習をしていることがあるのです。

もう一つの短所は、家庭学習が生徒の貴重な「可処分時間」を削っていることです。生徒が家で過ごす時間は限られています。部活動を終えて家に帰ると、夕飯を食べて風呂に入ります。塾や習い事がある場合もあるでしょう。学力向上は大切ですが、寝るまでの時間を勉強ではなく家族とゆっくり過ごすことに費やす、という考えもあります。しかもこの可処分時間は、通学時間や通塾の有無、家庭環境などによって個人差があります。

これらを踏まえ、「家庭学習は必要」ということを前提に、「生徒一人ひとりの学力向上にとって、どのような家庭学習が必要なのか」を、先生方に是非考えていただきたいと思います。

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第4回

意欲を引き出す「家庭学習」指導

やまもり・こうよう◎慶應義塾大文学部卒業。早稲田大大学院教育学研究科修士課程修了。同大博士課程中退後、現職。元世田谷区立駒留中学校講師。専門は教育心理学。主著に『学力〜いま、そしてこれから〜』（共編著／ミネルヴァ書房）など。

生徒が「やってよかった」と思える宿題を出せているか

家庭学習の内容は、全員必須か任意か、授業と直接関係があるかないか、予習か復習か、などのタイプに分類できます。いずれのタイプの学習内容でも、共通する指導の観点として次の三つがあります。

①個人差を考慮する

授業では、一斉授業の中で机間指導を行い、生徒一人ひとりに対する支援を意識していることが多いと思います。しかし、宿題は、クラス全員に同じ内容を課すことがほとんどではないでしょうか。本来は、一人ですする宿題にこそ、個人差を考慮した題材を渡す必要があります。とはいえ、現実的にすべての生徒それぞれに合った宿題を課すことは難しいと思います。生徒の理解度に応じて4、5通りに出し分けたり、重要な内容の時だけ出し分けたりしても良いでしょう。

これに関連して、先生同士が教科間で連携することも不可欠です。各教科がそれぞれの思惑で宿題を出していたら、結果として膨大な量の宿題が生徒にのしかかってしまいます。特に、理解が遅い生徒は授業にますますついていけなくなります。「どの教科が、どのような内容の宿題を、どれぐらい出しているか」を共有して、教科間で調整を図ることが大切になります。

情報の共有と調整といっても、大げさに考える必要はありません。例えば、職員室の黒板に、教科・学年ごとに「今出している宿題」を書き込むコーナーを設けて確認し合うだけでも、共有化は十分に図れるはずです。

②学習の見通しと価値を伝える

授業と同じように、宿題でも「これを学習すると何が出来るようになるのか」という見通しを生徒にきちんと示すことが大切です。家庭学習に取り組む意義や理由が見えないと、意欲も湧いてきません。

先生としては「この宿題は、今日学んだ内容をより生徒に深く理解してもらうために出す」というねらいがあったとしても、生徒がそのねらいを認識しているとは限りません。「この宿題をして授業に臨んだら、次の授業がよく分かった」「今日学んだことが、宿題に取り組むことでより理解できた」と生徒に実感してもらえるような宿題を出すことが大切です。「授業とのつながりを考えた宿題」や「宿題で取り組ませたことを生かした授業」を意識し、授業と宿題を結び付ける指導計画を練ることで、いかにして生徒に「家庭学習の成功体験」をさせるかが鍵になります。

③学習の方法を具体的に教える

生徒が一人でも学習できる方法を教える必要があります。宿題を出す度に「こうしなさい」と言う必要はありませんが、少なくとも授業の中で効果的に家庭学習をするための方法はきちんと指導したいものです。生徒の個人差に合った家庭学習の手引を渡したり、家庭学習ノートのチェックなどを通して、出来るだけ具体的に伝えることがポイントです。

さまざまな家庭学習の方法がありますから、生徒によって効果的な方法は異なります。私たちの調査研究によると、一定の学習意欲があって頑張って勉強している生徒でも、「どのような方法で勉強しているのかはっきりと意識していない」というように自分自身の学習方法に対する自覚が低いと、思うような成績を取れていない場合があることが分かりました（**下図**）。一見、隣りの友だちと同じ方法で勉強していても成績に結び付いていない生徒には、自分に合った学習方法を探す意識を持つことと、自分にとって効果的な方法を早く見つける必要があることを伝えるとよいでしょう。

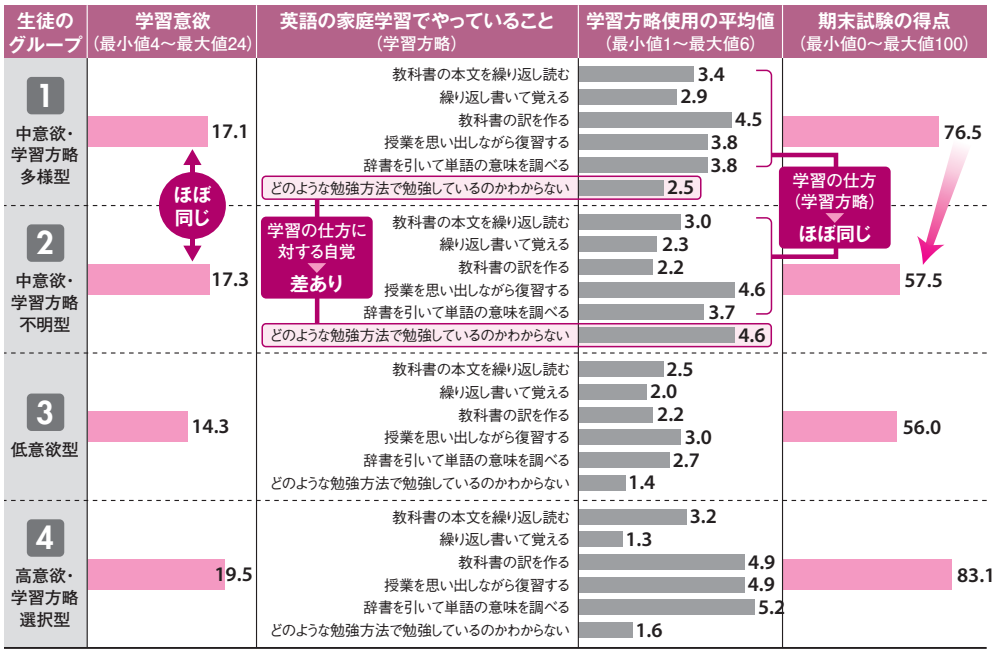
学び方を教える主体は、常に教師である必要はありません。「ついこの前まで自分と同じような成績だったのに、いつの間にか伸びていた友だち」は、生徒にとって非常に気になる存在であり、自分が学習を進めていく上でモデルにもなります。例えば、前回の定期テストで成績が大きく伸びた生徒の「学習計画の立て方」「弱点をどのように克服したのか」「ノートの取り方で工夫したこと」などの学習方法を、先生から生徒全員に伝えます。これにより、他の生徒が自分の学習方法を振り返り改善するヒントになります。あるいは、普段からノートの取り方について意見交換したり、自主学習ノートの展覧会を開くなど、学習方法の交流の機会をつくるのも一案です。

意欲が高まる定期テストは家庭学習指導のチャンス

個別対応や学習方法を伝えることの重要性をお話ししましたが、授業で出す宿題以外の場面も大切です。最大のチャンスは定期テストです。中学校の家庭学習のサイクルは定期テストを中心に回っていますから、そこを活用しない手はありません。多くの先生方が生徒に望む理想の家庭学習は、言われたことを単にこなすのではなく、自ら意欲的・計画的に学びに向かうことでしょう。定期テストの勉強はそれに近い形の学習方法でもあります。

多くの学校では、定期テストで基準点以下の生徒に再テストを課していると思います。

図　学習意欲・学習方略・学力の関係



「中意欲・学習方略多様型」1と「中意欲・学習方略不明型」2を比較すると、学習意欲も学習方略も同じ傾向を示す。しかし、「中意欲・学習方略不明型」2の生徒は自分自身の学習の仕方に対する自覚が低く、「中意欲・学習方略多様型」1と比べて学力が低いという特徴が見られる　＊Yamamori, Isoda, Hiromori, & Oxford (2003) を基に編集部で作成

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第4回

意欲を引き出す「家庭学習」指導

ところが、その生徒はなぜ自分が20点だったのか、次は何をどうしたらよいのかが分かっていません。そうした状態で、単に「受けろ」と言われているから再テストを受けているのです。ここに問題があります。「一人で勉強する時にはこういうふうにやりなさい」ではなく、「こういうふうに勉強すると効果的なんだよ」ということを、テストの返却時などを使って伝えてはどうでしょうか。先に紹介した生徒同士のノートの共有についても、学習への意欲が高まる定期テスト範囲を発表する時期に行うと効果的でしょう。

例えば、私が教師をしていた時は、定期テストの答案返却時の授業1コマ分を、これからの家庭での学習法について、生徒にアドバイスする時間に当てていました。生徒の名前を呼んで答案を返す時に、1人1～2分程度の時間をかけて、「A君はここが弱点だから、家庭ではこういうことに注意して勉強しなさい」「Bさんは、次の定期テストまでにここだけは必ず覚えておきなさい」といった個別指導をするのです。テスト直後は、自分が出来たこと、出来なかったことを、生徒は自覚していますから、効果が高いと考えたのです。残りの生徒には、どんなテスト勉強をしたのかを書かせ、それを集めて、成績が伸びた生徒の学習法をクラス全体に紹介しました。

先生方は、授業で意欲を持たせるための方法や理解を深めるための方法をよく知っています。校内にもそうしたノウハウがたくさん埋もれているはずです。家庭学習も学習活動ですから基本は同じです。授業で配慮していることを家庭学習用にアレンジする発想が出来るかどうか、そこに生徒の家庭学習を充実させるヒントがあるように思います。

学びに向かう集団づくりが家庭学習への意欲を高める

私は最近、少人数学級に関する調査研究に取り組んでいますが、「少人数学級の方が、生徒はより積極的に家庭学習に取り組むようになる傾向が強い」ことが分かりました。少人数学級には、他にも「生徒がお互いに励まし合うようになる」「生徒がお互いに励まし合うといった向社会的行動が見られるようになる」「クラスへの帰属意識が高まる」といった効果が明らかになっています。

私は、少人数学級と家庭学習の関係についてこう考えています。先生と生徒、あるいは生徒同士の関係が良好だと、生徒が落ち着いた雰囲気の中で、互いに励まし合いながら主体的に学習に取り組むようになり、その結果、家庭学習に対する意欲も高まる、という相関関係です。正確に言うと、「少人数学級にすれば家庭学習時間が増える」わけではなく、「生徒集団に学びに向かう雰囲気が出来ると、生徒一人ひとりの家庭学習に対する意識が高まっていく。学びに向かう雰囲気は、少人数学級の方がより形成しやすい」ということだと思います。言い換えると、教室の中で学びに向かう雰囲気が形成されていないのに、個々の生徒に家庭学習習慣を身に付けさせようとしても難しいわけです。少人数学級でなくても、学びに向かう雰囲気が学級の中に出来ていれば、そのクラスの生徒の家庭学習意欲は高まりやすいと考えられます。

教科担任同士、教科担任と学級担任がそれぞれの強みを発揮しつつ連携し、すべての生徒にとって本当に学力につながる指導とはどのようなものかを学校全体で今一度考え、出来るところから取り組んでいただきたいと思います。

家庭学習の課題

- 生徒の取り組みに個人差が出る
- 生徒の自由な時間を制限してしまう

意欲を引き出す家庭学習指導のポイント

- 個人差を考慮する
- 家庭学習の見通しと価値を伝える
- 家での学習の仕方を具体的に教える
- 学習意欲の高まる定期テスト期間を活用する
- 学級経営を家庭学習の促進に活用する

引用文献：Yamamori, K., Isoda, T., Hiromori, T., & Oxford, R. (2003).Using cluster analysis to uncover L2 learner differences in strategy use, will to learn, and achievement over time. *International Review of Applied Linguistics*, 41, 381-409.